
蒼南学園血塗れ帰宅部

皐月二八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼南学園血塗れ帰宅部

【Nコード】

N6844Y

【作者名】

皐月二八

【あらすじ】

山と海に囲まれた市にある小中高一貫学校の私立蒼南学園。其処に通う有名な兄妹がいた。容姿端麗・文武両道妹（しかも二人）に愛されまくる神ノ瀬 晴渡は、今日もぶらりと帰宅部人生を満喫していた。とても脆い、いやすで見せかけの平和を——。ヤンデレ姉妹とその兄、周囲の人々がおくる物語、ゆるゆると開幕！

第一話 二人の妹（前書き）

こんにちは、皐月二八です。

ゆっくりのんびり修羅場や拷問を書いていきたいです。

第一話 二人の妹

私立蒼南学園高等部（どーでもいい注釈だけど、中国蒼南県とは一切関係ない）には、二大アイドルがいると言われている。

一人はまあ置いておくとして、もう一人は俺もよく知っている人間だ。

「お兄様」

「ああ」

校門前で待っていたミューに手を振ると、彼女はお嬢様らしく優雅に会釈した。

長い。墨を塗ったような黒くて艶やかな髪と瞳。細身だけどスタイルは完璧で、ザ・大和撫子といった風貌の少女。いや、実際に大和撫子だけどねえ。

「ミュー、息災かい？」

「お兄様の御顔を見て、実に宜しいです」

「そっかそっか。うん、何より」

「では」

「ん」

ほぼ毎日変わらない挨拶をしながら、俺は鞆を持ち直して歩き出した。その一歩後ろを、給仕のようについてくるのがミューだ。

「あ、晴渡先輩、深雨さん、さようならー」

「はい、さようならー」

野球服姿の一年生が手を振って挨拶をしてくる。俺たちも笑顔で手を振る。

部活がある連中は大変だよな。まあ、其れが楽しいんだろうけど。

「フッフ、お兄様は人気者ですね。ミューも嬉しいです」

「馬鹿言え。皆お前目当てだよ」

ミューはモテる。其れこそ、高等部・中等部・小等部にまでその噂が広まっているくらいモテる。何しろ超が付く程の美少女で、おまけに一応社交的だ。性格も清楚で御淑やかで……うん。対面的には、問題ない……はず……なんだよなあ。

「そうですか？ それはそれは……不毛なことをしますね」

ミューは誰もいないのを確認すると、直ぐに笑顔を消した。まるで、携帯の電源を切った感じで、カチリという擬音が聞こえてきそうなほど、瞬時に。

「私には、お兄様以外必要ありませんのに」

「……」

ふう、と妹には聞こえないように溜息をつく。

ミューは昔からそうだった。両親よりも真っ先に俺に懐き、何時でも俺の後ろをひよこひよこついてきた。

親から何を言われても、決して俺から離れようとせず……もう一人の妹のことも、見向きもしなかった。

もう一人の妹……ギンも、ミューの事を快く思っていないみたいだけれどなあ。

そして、何故か俺以外の人間全員を敵視し、外面だけの笑顔を振りまくことくらいしかなかった。

当然、数え切れないほどの告白も一刀両断している。ていうか、ガッ無視している。

「あ、お兄様。今日はなににしましょうか？ 昨日は煮込みハンバーグでしたね。今日は……」

「ん、あ、そうだなあ……うん、カレーが食べたい」

「わかりました。腕によりをかけておつくりしますね」

「ありがとう」

我が家の家事は、主に二人の妹が担当している。基本的に炊事は交代交代、掃除・洗濯はギン、買い物はミューがやる……という分担が、何時の間にやらできていた。

「では、私は買い物に行ってきます」

「手伝おうか？」

「御気持ちだけで結構です。お兄様を煩わせる価値などありませんので」

「……そうか」

名残惜しそうに俺に一礼したミューは、速足でいつものスーパーに向け歩いていった。

「おかえりなさい」

玄関のドアを開けると、無駄に広い玄関にてギンが待ち受けていた。

正座し、深々と頭を下げている。

ミューと同じように長い、けどミューと対比するかのよう^ににシミー
つない真っ白な髪がフローリングの床を這っていた。

「ただいま、ギン」

「はい、お兄様」

立ちあがったギンは、深紅の瞳で俺を見つめた。彼女は先天性色素
欠乏症^{ビレ}だった。

フリルのついた黒のゴスロリチックな服を着ている。此れも、いつ
も通りだ。

身長は、長身で俺と然程変わらないミューと比べればかなり小柄だ
けど、服の上からでもわかる胸は中学生とは思えないほどに大きく
て、ミューよりは小さいけど十分大きい。

……どうして、ウチの姉妹は二人揃ってかくも胸が大きくてしかも
美少女なんだ。何時まで経っても慣れやしない。

「ギン、本当に何で俺の帰宅が分かるんだ？」

「お兄様の匂いが感じましたので」

クスクスと笑い、ギンは俺の鞆を手を取った。

「冷たい御飲物を用意しています」

「ん、何時もありがとう」

ギンの頭をゆつくりと撫でる。彼女の髪は傷みやすく、容易にに触れるとすぐに駄目になってしまう。

だから、ギンの髪はギンを含め、俺しか触れてはいけないそうだ。ちなみに、俺はギンが小さいころからいつも彼女の髪を洗ったり手入れたりしていたから、扱い方にかけてはプロだ。

……うん、プロだ。プロだからといって、何だというわけでもないけどさ。

ギンは日傘がないと外に出られない。彼女は超が付く程の人間嫌いということもあって、ギンは一応中学生だけど学校には通っていない。特例で、蒼南学園中等部の通信授業を受けている。身も蓋もない言い方をすれば、引きこもりというヤツだ。

「お兄様、宅配便が届いていますよ」

「ん、そっか」

予約しといた本が届いたみたいだ。ギンから手渡され、「神ノ瀬かみのせ晴渡せいと」の宛名を確認した俺は、ギンに御礼を言って包装を解いた。

「やったやった。手に入ったぞ」

「それは？」

「ん、ガーデニングの本」

「お兄様は、ガーデニングがお好きですね」

俺が家出する唯一の家事は庭いじりだ。もっとも、家事というよりは趣味の領域だけだ。

「最近、家庭菜園に興味が出てきてね」

「それは素敵です。お兄様が育てたのなら、それこそ至極の美味しさになるでしょう」

「はは、ありがとう」

嬉しい気分になって、俺は自分の部屋へと戻っていった。

「あ、掃除はしておきましたよ」

「……自分の部屋の掃除くらい、自分でやるっていつも言ってるんだけどなあ……」

「お兄様のお部屋の掃除は、ギンの仕事です」

胸を張るギンの姿に苦笑しながら、俺は今度こそ自室に引っ込んだ。

「ただいま」

「あ、おかえり」

「おかえりなさい、お姉様」

「ありがとうございます、お兄様……そして、ぎんや銀夜」

買い物袋をぶら下げたミューは、直ぐに着替えをしに部屋に向かっていった。

ちなみに、ミューは家では和装が多い。名門のお嬢様らしい格好だ。まあ、俺とギンはあまりそういう格式ばった格好は好きじゃないんだけど。

暫くして、キッチンから料理をつくる音とミューの鼻唄が聞こえ出した。

……疲れたし、少し眠ろうかな。

そう思って、俺はベッドの上で瞼を閉じた。

第一話 二人の妹（後書き）

次回は二人の妹たちのターンです。

第二話 似た者憎悪同士（前書き）

ミュー回。

まだまだヤンデレ成分薄めです。

第二話 似た者憎悪同士

チラリ、と二階の、ちょうどお兄様の部屋がある辺りへと視線を向ける。もつとも、此処からは白い天井と其処から吊り下がっているシャンデリアくらいしか見えない。

……どうやら、お兄様は寝付いてしまわれたようだ。気配を探りつつ、ふう、と息を吐いた。

やはり、お兄様はお疲れになっていた。お兄様と買い物という誘惑を断ち切ってまで、一人で行って正解だった。

今日は体育のある日だ。お兄様の授業はサッカーをやっていたはず。危険なことはなかったはずだし、単にお疲れになったただけだろう。

トントンと、リズミカルに包丁の音が聞こえる。

料理は、好きだ。

お兄様に喜んでもらうため。それだけのために、私は腕を磨き続けた。お兄様のお好きな料理や食材・調味料に味付けは勿論、お兄様の舌に合う温度や体調によって変わる食欲の度合いも、私は全て記憶している。

栄養なんて、それ以前の問題だ。碌にバランスが取れていない腐った料理など、お兄様の御口に入れるわけがない。

何より、食材は人間と違って捌くのに手間がかからない。

人間ならおぞましい悲鳴を上げ、まるで羽を？がれた蛾のようにジタバタと這いずりまわり、目、鼻、口から汚い体液を撒き散らしな

がら許しを請うてくる。何度見ても、吐き気がして……不快なほどに爽快になる。

コトコトと音を立てるカレー鍋を見て、香りを嗅ぐ。……少し、スパイスが足りないか。

準備は抜かりなく、そしてあの女からも注意を離さない。

テーブルを拭き、コップに飲み物を注いでいる銀夜ぎんやに声をかける。

「銀夜、首尾はどうなっている？」

「問題ありません、お姉様」

銀夜は鬱陶しそうに私を見た。「話しかけるな」と目が言っている。当然、無視する。私だって、好きでお前なんかと口を利きたくない。

「いい加減、警察も諦めれば良いのに……連中は無駄しかすることがないのかしら」

「どんな無能でも、ここ一月だけで翠ヶ丘市みどりがおかに限っても数十人が行方不明になれば、何かあると疑うのでは？

全く、お姉様がいけないのですよ、脳筋なんですから……あれほど言っただけではありませんか。消すならもつと慎重に動くべきだと。なのお姉様ときたら、一夜で多い時には八人も……」

「仕方ないじゃない。引き籠ってお兄様のお荷物になることしかできない屑と違って、私はお兄様の敵が一秒でも放し飼いにされてい

るのが我慢ならないのよ」

「……どういう意味ですか、それ」

目を細め、銀夜がゆつくりと歩いてくる。

「料理の邪魔よ、消えろ」

「ふう、女の嫉妬は醜いですよね」

「……嫉妬？」

「今日、お兄様に頭を撫でてもらいました」

トン、と包丁が止まる。私は顔を上げ、唇を噛み締めた。

「一つ年下の妹と比べれば、四歳下の妹の方がずっと可愛いに決ま
ってますものね」

「何が言いたい？」

目の前で嗤う雌豚を斬り刻みたい衝動を堪えつつ、お兄様を起こさ
ないよう慎重に、小さな声で呟く。

「知っているんですよ？ 私は生まれつき日に弱く、髪も傷みやすい。だから、ずっとお兄様がつきつきりで私の傍にいてくれました……そのことに、嫉妬している雌がいるということくらい」

スツ、と。お兄様に聞こえないよう、出来る限り騒音を堪えながら……私は、銀夜に蹴りを叩き込んだ。

ほぼ無音。しかし、並みの人間の腹を貫く程度には強力な蹴りを両手で受け止めた銀夜は、ニヤリと笑いながら拳を突き出してきた。

其れを紙一重でかわし、銀夜の関節を締める。

「カレーが焦げてしまいますよ？」

「雌豚の駆除には、一秒も必要ない」

「……もう約一秒経ってますけど？」

「そうね、此処は一時休戦が吉か」

直ぐに鍋の前に戻り、カレーをかき混ぜる。雌豚に蹴りを入れるついでに切っておいた食材を投入し、再びかき混ぜる。

「まったく。お兄様の負担にしかなくていない雌豚が。貴女なんて死んでいれば良かったのに」

「その御言葉、そっくりそのまま返します。それに、お姉様だってお兄様に迷惑をかけていたではないですか」

「……」

「優秀な天才妹……そのことで、両親も親戚も、お姉様ばかり可愛がってましたよね？ お兄様は妹より遥かに劣る出来損ないと蔑まれ、それでもお姉様の前ではいつも笑ってましたよね？ そしてお兄様は……一人で、泣いていました」

雌豚の語る其れは、忌まわしい記憶。嘗て持て離され、天狗になっていた頃の自分。其れでいて、何食わぬ顔でお兄様に甘えてた自分のせいで、お兄様がどれだけ苦しんでいたかも知らずに――

叶うなら、過去の自分を縊^くり殺してやりたい。

ある日、たまたま泣いていたお兄様と、お兄様を殴る親を見かけた私は全てを悟った。

同時に憎んだ。

天才と言われながら、何もわからなかった自分の脳に。わkarうともしなかった自分の心に。

だから、私は――。

「あいつらを、殺した」

「思えば、其れが面倒の始まりでしたね」

ため息をつく銀夜。

「親族を全員黙らせて三人で暮らせるようにして、金の亡者どもを追い払って遺産の相続を済ませて……まったく、両親を殺すのなら、せめてお兄様が働ける年齢になるまで待つべきだったのですよ」

「それまで堪えてるというの、お兄様が傷付けられるのを」

「殺さなくても、洗脳するとか馬鹿を嚇^{けしか}けて犯させるとか、手はあったんですよ」

「その程度でお兄様を傷付ける罪が消えるとしても？　大体、貴女も拷問には参加してたじゃない」

「私だって、腸煮えくり返る思いでしたから。お姉様が遊び始めたので、便乗しようかな、と」

「……銀夜、私は貴女が大嫌いよ」

「奇遇ですね、私もお姉様は大嫌いです」

「そう、私たちが信じるのは――」

「「お兄様だけ」」

同じように同じ言葉を呟き、私たちは睨み合った。

「……で、次は誰を？」

「そうね……あの傷女はどうかしら？」

「躑躅堂先輩ですか？」

あれはもっと後に、もっと時間をかけてやるのでしょうか？」

「……言ってみただけよ」

思い出すだけで腹が立つ。まさか私の目の前で、お兄様に告白するなんて。

お兄様がいなければ、即座に首をへし折ってやるところだった。本当に、殺したい。

……が、忌々しいことにあいつはお兄様とは知り合いだった。容易に消すわけにもいかない。

そう、時間はまだある。

「だから、殺しはしないということよ」

「あー、そういうことですか」

頷く銀夜は、その後笑って私を見る。

「深雨お姉様は本当に怖いですね」

「貴女に言われたくないわ」

……結局は、姉妹ということか。

第二話 似た者憎悪同士（後書き）

うん、流石に二話目にして此れは早まったかな……いや、二人のキャラだところなっちゃうんですよね。

次回は学園パートです。

第三話 2・D教室（前書き）

今回、新しい登場人物が多いですが、本作は基本的にサクサク進めるつもりです。

テンポよくするって難しいですね……。

登校、教室に入るまで。

第三話 2・D教室

朝。何時ものように、俺より一步後ろにはミューが歩いている。声をかけられるたび、につこりと笑顔を振りまくが……時々思う。ミューって、一体何枚の猫の皮を重ね着しているんだろう？

ミューは、俺たちの両親が死んだ日から変わった。

突然の交通事故だった。

よりによって、結婚記念日に旅行に行っている最中に、親父の愛車ごと崖から落ちていった。

その時、情けないことに俺は何もできなかった。唯、現実味がなく呆然としていただけで、葬儀とか遺産の引き継ぎとかは全部ミューとギンがやってくれていた。

それ以降、ミューもギンも、俺の前では露骨に他者を嫌う様になった。いや、見下している、と言った方がいいのかもしれない。俺の前でだけ本性を出す。でも……其れは、本当に彼女たちの本性なのだろうか、と考えてしまう。唯、猫の皮を一枚剥いただけなんじゃないか？ と思ってしまう。

……止めよう、不毛すぎるし、妹を疑う理由なんて一切ないんだから。

そんなことを考えていると、ポンと肩を叩かれた。

振り向くと、其処には俺より頭一つ長身で、短く刈った髪が特徴的な同級生の姿があつた。

「右ゆういちか」

「よお晴渡。何だ、名前と違ってシケた面してるぜ？」

「あら、武笠^{むかさ}さん、おはようございます」

「おー、深雨^{みづ}ちゃん。今日も美人だねえ」

「御冗談を」

右一はスポーツバックを持ち直すと、爽やかに笑った。如何にも体育系だと分かるが、実は彼はクラス副委員長でもある。まあ、押し付けられたと言った方が正しいかもしれないけど。
確か、彼はサッカー部だったっけな。

「朝錬は？」

「ん、おう、今日は無いんだよ。ほら、今日は“運動連”の定例会があんだろう？」

「あー、そっか」

運動連。運動部連合組織の略だ。小中高一貫学校で、しかもマンモス校でもある蒼南学園は部活の数もとても多い。其れこそ、国内最大規模といっても過言じゃないくらいだ。

だから、蒼南学園は部活を運動部と文化部に分け、其々を統合して予算とかその他の話し合いの場を設けている。

特に大会とかが多い上に備品などでやたらと金のかかる運動部では、各部での予算の取り合いや施設の優先権などで争いが絶えなく、言わば公式の場で争うための組織が此の運動連だったりするそうだ。

もつとも、予算争いが熾烈なのは文化部でも同じだそうだけど。ちなみに、文化部連合組織は“文化連”と略される。

「帰宅部の俺とミューには関係ないけどね」

「ははは、ウチあ部活動強制じゃないが、部活の数自体は多いからな。帰宅部はそんなに多くねえ」

其の儘雑談タイムに突入する俺たちを、ミューがぴったり後ろから張り付いていた。

校舎内でミューと別れ、俺と右一は教室へと入ろうとした。教室前には「2・D」のプレートが付けられている。

が、俺は其処で足をとめた。

教室前の廊下に、一人の女子生徒が佇んでいたからだ。

左目を包帯で隠しているが、それでも美人だと分かる顔立ち。ミューと同じくらい長身で、スタイルもそこそこだと分かる……けど、何て言うか、顔色が悪い。

もう、幸薄そうな感じしかない。失礼だから口には全体に出さないけど。

「躑躅堂さん」
つじじやん

「ひ、ひあ!？」

俺が話しかけると、彼女は飛びあがらんばかりに驚いた。其の儘フルフルと震え、涙目になって俺を見上げる。長めのポニーテールがゆらりと揺れた。

「せ、先輩、おはようございます……」

相変わらず、消え入りそうなほど小声で喋り、ぺこりと頭を下げる。でも、彼女曰く此れでも積極的な方だという。何でも躑躅堂さんは男性恐怖症で、おまけに大の気弱だとか。
……まあ、見ててわかるんだけどね。

「あ、あの先輩……先週の御返事は……」

「ああ……」

実は俺は、先週此の人に告白された。あのときは、もう本当に驚いた。

何しろ、ミューに並ぶ“二大アイドル”のもう一人……：人気が高いパインフレを起こしている躑躅堂さんに告白されるなんて、全く思っていなかったからだ。

何でも、護ってあげたくなるような小動物っぽさが男女ともに人気

らしい。

ちなみに、彼女は高等部一年ではミューの次に成績がよく、つまり学年二位。

「流石に廊下では……」

「あつ、そうですね……すみません」

朝早く、生徒が少ないとはいえ流石に廊下で告白云々の話をするのも気が引けるし、躑躅堂さんに変な噂が付いてしまえば俺の責任だ。其れだけは避けたいし、あつてはならないことだと思う。

「ごめん、正直、まだよくわからないんだ……」

「い、いえ！ わたしがいけないんです。いきなり呼び出してラブレターなんて渡してしまったら……」

躑躅堂さんと初めて会ったのは二カ月前、つまり、今年の四月。入学式の後、たまたま困っていた彼女に出くわしたのが切欠だった。流石に、話すようになってから二カ月しか経ってない相手と交際するのは気が引けるし、何より彼女は学園のアイドルだ。俺より相應しい人はいくらでもいるだろうしなあ……。

「じゃ、じゃあ……」

「はい。それでは」

躑躅堂さんはもう一度ぺこりと頭を下げると、貧血を起こしている人みたいにふらふらと歩いていった。

此れも何時ものことで、もう見ているこっちとしてはいつ車に撥ねられるか心配でしょうがない。

彼女の幼馴染でもある浮雲うきぐもさん曰く、子供の時からああいう歩き方だけで事故に遭ったことは一度もないそうだけども。

「終わったかー？」

「ん、ああ」

気を遣ってくれたのか、いつの間にか離れていた右一が近付いてきた。本当に気が回る友人で、俺も助けてもらった回数をあげればキリがない。

……彼の方が、よっぽど躑躅堂さんに相応しいと思うけどなあ。

「紫亜しあちゃん、本当に可愛いよなー」

「……………ああ」

下心があるわけでもなく、右一は純粹に思ったことを口に出している。大体、右一は別に女好きでもなく、寧ろ全く恋愛に関心がないからだ。

理由は、よくわからない。

教室に入り、席に鞆を置く。まだ人数はまばらで、俺と右一を足しても二桁に昇らない数しかない。
ふと黒板に目を向けると、丁寧に黒板を拭いている小柄の少女がいた。

「おはよう、雁飛^{かりと}。日直かい？」

「ん？ ああおはよう晴渡。君も早いね」

振り返ったのは、色白で整った顔。彼女は笑顔を咲かせると、黒板を拭く手を止めて俺の方へ向き直った。

雁飛は男のような名前だけど、立派な女性だ。明るい茶色の髪をボブにしている。

彼女とは中等部の時から付き合いで、其れからはクラスも班もずっと同じだった。勿論今もそうだ。

チラリと黒板の隅を見ると、日直欄の下に「松風^{まつかぜ} 雁飛^{かりと}」と書かれている。

「委員長に加えて日直か、大変だねえ」

「それでもないさ、ボクが好きでやっていることだしね」

雁飛はうつすらと笑うと、満足そうに頷いた。

「……それより、さっき廊下に君と躑躅堂さんが立っていたのを見たんだけど……トラブルでも？」

「ん？ いや、ちょっと話してただけだよ」

「そうかい？ だったらいいんだけどね……。彼女はとても人気だ。周囲にはストーカーまがいな行動をしている者も多い。十分気を付けてくれよ？」

彼女とトラブルがあれば、君にどんなトラブルが降りかかるか考えるだけで恐ろしいよ。正直、彼女には関わらない方が得策だね。彼女は夢げに散りかけた、茨の園のようだよ」

……雁飛。そういう君も、自分がどれだけクラスや周囲から人気があるのか自覚しているのか？

そう言いかけて、口を閉じた。

躑躅堂さんに対して少し辛辣な気もするが、それでも雁飛は俺のことを心配してくれている。無下に返すのもよくないはずだ。

「はは、周囲から視線を浴びるのは、妹たちのことで慣れてるよ」

俺がそう返すと、雁飛は真剣だった表情からはったとしたような表情

に変わった。そして俯き、目尻を下げる。

「……すまない、つい失念していたよ。そうか、嫉妬の視線を受ける辛さは、君は知っていたんだ、だというのに……」

「気にすること無いさ、ありがとう、雁飛」

嫌な気分になんかせちゃったな。後でコーヒーでも奢ろう。雁飛の好きなミルクコーヒーを。

財布の中身を思い出しながら、俺はポンと雁飛の肩を叩いた。

第三話 2・D教室（後書き）

次回は授業とか……と見せかけ、ギン回です。

ころころ場面が変わってすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6844y/>

蒼南学園血塗れ帰宅部

2011年11月21日12時10分発行